
とある少年の日常

宇治金時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の日常

【Zマーク】

Z9514R

【作者名】

宇治金時

【あらすじ】

妖魔退治に優れた一族としてその筋では有名な少年は所属する組織の要請で超自然的な事件の多い地区に学生として潜入する。これはそんな少年の日常の一部を描く青春バトルホーストーリーになる予定である。

豊かな心を持つたらそれなりの経済的余裕が必要（前書き）

始めまして宇治金時です。物語を書くって大変ですねえ。将来小説を書く仕事をしたいと思いつつも中々筆力の上がらない私です。まだ一話目ですが、文章を読んで不自然な点や感想があれば教えてください。

豊かな心を持つたらそれなりの経済的余裕が必要

ボロイアパートを選んだ際のメリットはと言えば家賃が安いと言う事だ。その際立て付けが悪い。隙間風が多い。そういうたゞメリットには目を瞑る必要がある。

斗藏 慶一のアパートは正にそれだった。彼の部屋は辻沢市的一角に建つ1DKの部屋だが一円一万五千円、トイレ（汲み取り式）はあるが風呂は無い。

キッチンは板張りの床だが、歩く度にミシミシと不穏な音が鳴るもの仕方の無い事だ。

畳の敷かれた和室は雨漏りと隙間風が多く、一年を通してじめじめとした空気や、隙間から吹き込む冷たい風と戦う事になる。

季節によって戦う相手は異なるが、十一月を向かえた今の季節だと当面の相手は寒さである。

特に暖房器具を切つて朝の冷え込み方ときたら半端ではない。洗面器に溜まつた水は凍り、出しつぱなしにしていた缶ジュースにもシャリシャリとしたシャーベット状の物が混ざり、人間を入れるくらい巨大な冷蔵庫の中はこんな感じなのどうと無駄な人生経験を教え込まれた慶一は今も布団の中ですやすと寝息を立てている。時計の針が五時を指した頃、あらかじめセットしていた携帯のアラームが冷たい部屋の空気を振動させた。慶一は携帯を手に取るとアラームを解除し持ち主を心地よいまどろみ状態から引きずり起こした携帯電話を無造作に投げ捨てた。

己が職務をまつとうしたにもかかわらず、寝起きの悪い持ち主に邪険の扱われた哀れな携帯は一回三回と小さくバウンスしテーブルの足に当たるとそれ以来、拗ねたように沈黙した。

暫くの間、布団から出ずにぼーっと天井を見つめていた慶一だったが、やがてゆっくりと上半身を起こすと大きく伸びをする。

「寒い」

誰に聞かせるわけでもなく、現状を呴いてみた慶一はボリボリと頭を搔きながら布団から出て、真っ先にストーブの電源をオンにした。

「暖房器具を発明した人はもちろん偉大だけど、暖房器具が無かつた時代を生きた人たちはもつと凄いよな」

どうでもいい独り言を言いながら、物心ついたか頃から十余年、欠かしたことの無かつた武術の鍛錬を行うため、ジャージに着替える。

慶一の実家は対妖魔戦に優れた一族として、退魔や除霊等を生業とするもの達の間では有名だった。慶一が武術の鍛錬を怠らないのはこのためで、本當だつたらこんなボロボロのアパートに住むような人間ではないのだ。

現代の科学では説明出来ない事件や事象は確実に起こっている。あくまで非公式にだが、そういう事を専門に捜査し解決へと導く国家機関が明治時代から存在し、非公式故その機関には名前は無いが、全国の除霊師や退魔師達はそこへと登録される。

慶一もそんな中の一人だ。親元を離れてわざわざ遠くの学校へ通うのも、国からの要請で超自然的な事件の絶えない辻沢市へ学生として潜伏し調査せよとのお達しがあつたからだ。

「でも、どうせならこんなボロボロのアパートじゃなくて。もっと普通の場所を用意してくれればいいのに」

鍛錬に行こうと、ドアノブに手を掛けた状態のまま俯きボソボソと呟くその姿は何処と無く哀愁の様なものが感じられる。

「いい感じに悲壮感が漂ってきてるじゃない慶一君。そんなんじゃ生靈が出来ちゃうわよ」

突如聞こえてきた声に慶一が驚かないのは、知り合いが涼しげな笑みを浮かべ腕を組みながら窓枠に腰掛けている姿が容易に想像できたからだ。疲れた目つきのまま声の主の方へと目をやる。

慶一が考えた通り、腕を組み、窓枠に腰掛けるほつそりとした体型の女性がいる。

思わず溜息が出た。

彼女は政府の非公式機関に所属し、慶一にこの地の守護を要請し、さらに慶一を馬車馬のように働かせ、何より彼にこのようなボロアパートをあてがつた張本人、東条桜子とうじょう さくらこである。

長いストレートの髪を後ろで縛り、目尻の少し下がった人の良さそうな美人と評して構わない外見とは裏腹に腹に何物もありそうな性格をしている。

彼女が上司となつてしまつた慶一には己の不幸を悔いる事しか出来ない。

「桜子さん、今何時だと思つてるんですか。それに何でドアじゃなくいつも窓から入つてくるんですか」

「だっていつも窓空いてるじゃない。戸締りの大切さを知つてもうおづと言つお姉さんなりの優しさなんだけどなあ」

「閉まらないんですよ……壊れてるんです……来たときから……！」

「あらそつだつたの、なによお、言つてくれれば修繕費くらい出したのに」

「嘘だ。こんな牢屋みたいな部屋に俺をぶち込んでおいて」

搾り出すような慶一の声には何かの怨念めいたものが籠つていた。
「しようがないじゃない。政府がけちなんだから。非公式の機関に多くの予算金は出せないって。なんだつたら引っ越せば。別にここに住まなきやいけないつて決まりは無いんだし。お給料貰つてるでしょう？」

桜子が何気なく言つた「引っ越せば」の一言に、慶一は力なく項垂れると言つた。

「……です」

「え、なに？よく聞こえないんだけど」

「無理なんです。俺の給料は完全に実家の方が管理してまして、一人前になるまでに決められた額で生活出来るようにしたり。あの両親ですから、人の金に手をつけるようなことはしないと思つんですけど

けど、引越しの事を話したときも、だつたら少しずつ貯めて引っ越し
せと

「ふうん、真っ当な意見ね。それでいくら溜まつたの？」

「三万」「

「一年も居て？つて事は一ヶ月辺り一千五百円つて事？」

「ええ、一ヶ月五万円ではそれが限界です」

「……今なんて？」

「だから一ヶ月五万円貯つてます」

桜子は目の前でうなだれる少年の生活を想像してみた。一ヶ月八万円の仕送りでやりくりした場合。家賃一萬五千円で残額が二万五千円。更に光熱費や携帯代を払つたらギリギリ生活出来なくは無い、出来なくは無いが……

「あなた、今まで何食べてたの？」

「ええ、幸いこの辺りには自然が多いので食うのに困つたときにはその辺から野草を摘んできて食べてます。蛋白質は川の魚や野鳥を捕まえて摑つてます」

サラリと非常に現代人離れした生活模様を暴露する慶一だつた。

「なんと原始的な……」

「引越しって大体いくら位貯めればいいんでしょう。俺ここに来たときは手続きとか全部桜子さんにやつてもらつたからそうこうした事あまりわからなくて」

その調子じや引越し資金を貯める前に一人前になるわよ、とは口が裂けてもいえない桜子だつた。

「そ、そうね。最近良くやつてくれてるし。今日の仕事は少し厄介だからそれが済んだら臨時のボーナスくらいは出してもいいかも」

桜子の言葉を聴いたときの慶一はアメリカのスラム街で生きることに必死になつていた人間が始めて人の優しさに触れた時の様な表情をしていた。

「さ、桜子さん。俺、今まで桜子さんの事誤解してました」

感極まつた声の慶一。

「いいのよ。今まで一年間よく頑張ってきたわね」

桜子には珍しく慈愛に満ちた声だった。

その声を聞いた慶一の目に薄つすらと涙が浮かぶ。

「俺今まで、桜子さんのこと、堤燈アンコウみたいな人だと思ってました」

しゃくり上げながら今までの桜子へのイメージを吐露する慶一。

「……は？」

固まる桜子。

「ほら、堤燈アンコウって綺麗な光で獲物を呼び寄せて恐ろしい本体が出て行って捕食するじゃないですか」

分かりやすい解説をつける慶一。

「うん、それで？」

優しい声に聖母のような微笑みを浮かべ、先を促す桜子は危険だと普段の慶一なら気付いただろう。

「桜子さんも外見は優しそうで美人なのに、いざ近寄っていくとお腹の中は真っ黒どころか魔女の鍋の中みたいになつてゐるし、捕まえた鴨は絶対逃がさない人だつて思つてました」

しかし慶一は止まらない。次々と紡ぎだす言葉は着実に桜子の何かを削り取っていく。

「……」

聖母桜子という題名でどこかの美術館に寄贈したい程素晴らしい

微笑を浮かべた桜子の心境を読み取る事は至難の業だろう。

「でも違つたんですね。ちゃんと人間的な優しさを持つた思いやりのある人だつたんですね」

涙ながらに桜子に吐露する慶一は桜子の変化にまだ気が付かない。

「そう、堤燈アンコウとはよく言つたものね。おかげであなたが普段私にどういう感情を抱いているか凄く分かりやすく伝わってきたわ」

そこでようやく慶一は気付いた。桜子の微笑が完璧すぎる事に。自分の言動を思い出し、たっぷり五秒はフリーズした後、慶一は

聞いた。

「桜子さん。もしかして怒ります?」

桜子の表情が聖母の微笑みを浮かべ、優しい声色のまま話しお出した。

「あなたが私の事をどう言おうがそれは慶一君、あなたの自由よ」慶一の胸に猛烈に嫌な予感が込上げて来た。

「だから……」

桜子の表情が聖母の微笑みから悪魔のような笑顔へと変わった。

「あなたが言ったことに私がどう反応を示すかも私の自由な よ

ゆつくりとした動きだが確実なプレッシャーを「えながら前進していく。

「待つて、桜子さん。こんなボロイ家で暴れないで、壊れるから、本当に壊れるから。ちょっと待つてええええええええええええええ！」

今が朝の五時過ぎだという事も忘れ絶叫する慶一に体重を乗せた拳骨が振り下ろされた。

ベアで頭を殴られた時の鈍い痛みの後にジンジンとした痛みが込上げて来る。

「つてあれ。これだけ？」

片手で頭をさすりながらも桜子のお仕置きに納得いかないようだ。

「もつと殴つて欲しいの？もしかして慶一君マゾ？」

桜子は頭のなかに真っ先に浮かんだ可能性をそのまま口にしてみた。

「違います。てっきりボコボコにされると思ってましたから。一発目の拳骨で氣を失つて。それから死ぬまで殴る蹴るの暴行を加えられるものだとばかり」

握られた拳がもう一度慶一の頭に振り下ろされた。

「いてっ」

「何時も何時も一言多いのよ慶一君。いいのよ一発殴れば氣が済ん

だんだから。わざわざ追い討ちなんて入れないわよ。とにかく私がつてわざわざ慶一君に拳骨をあげに来たわけじゃないんだから。本当に渡したかったのはこっち

そう言つて慶一に渡された物はそれ程大きくない。両手の平でスッポリと覆い隠せるような横長の長方形をした黒い板状の物体だった。

「なんですか？」

「その中央のボタンを押してみて」

言われた通りに中央にあるボタンを押すと、慶一の目の前に小型ノートパソコンのディスプレイ程の大きさをした画面のようなものが飛び出した。

「うお！なんですかこのSFチックな不思議アイテムは？！」

慶一は突然飛び出す絵本よろしく、三次元に光臨した画面を触ろうとしたが、指は画面を擦り抜けてしまう。

「普通に触ろうとしても触れないわ」

目の前に現れた画面に興味津々な慶一の様子に苦笑いしながら、桜子は説明を始めた。

「靈子の事は知ってるかしら？」

桜子の問いに慶一が少し考える素振りを見せた。

「ええと、たしか妖魔や人靈等の体を構成する粒子の事ですよね。素粒子の一つで大分昔からその存在は予言されてたとか」

それでも答えられるのはやはり対妖魔戦の名門、斗蔵の人間だからだろうか。

「靈子が思念や怨念に反応する特殊な物質だつて事も知ってるわね？」

「ええと、なんとなくは。人の想念が靈子を集め、形を成したもののが妖魔だつたり人靈だつたりって事ですよね。家で教わった事ですけど」

「まあ、大方それで合つてる。それも同じよつまりこれは靈子を集める特殊な磁場を発生させてハードディスク内の内容を零体として

投影する装置つて事よ」

この言葉の意味が分かる人間だつたらその深いところまで考えが回るのは当然の事だ。慶一とて例外ではない。

「それつて靈子の存在が事実上証明されたつて事ですよね」「そうよ。まだ分からぬ事も多いけど、靈魂や妖魔の存在が科学的に証明される日もそう遠くないわ。でも、その装置には欠点があつてね」

「やはりですか」

慶一もこの装置の欠点に気が付いたらしい。

「この装置『俺達』じゃないと扱えませんね」

桜子は一度おどけたように肩をすくめる。正解ということだ。

「そもそも私達が超自然的な事件の捜査を任せている理由が正にそれだもの」

靈子はそもそも見ることの出来る人出来ない人が居る。より正確に言えば視力検査で2の人も居れば0・5の人も居るようだ。靈子を見る力も人によつてまちまちなのだ。

慶一とて靈視そのものは見ることが出来ない。しかし、靈子を一点に集め、密度を濃くした状態であれば見える。それが妖魔であつたり靈魂な訳だが、これすら見えない人が世界には大勢居る。

例えるなら、全世界の平均視力が0・5なのに対し慶一たちのような人間はその平均値を大幅に上回る数値なのだ。

「でも、私達にとつては非常に有効よ」

「と言いますと?」

「貴方が普段妖魔と戦う時の十分の一でいいの。力を指先に集めて触つて見なさい」

桜子に言われ慶一は自分の体内に取り込んだ靈子を体の中で氣と共に練り上げる。と粘土の高い靈子結合物質を作り出し。それを指先に集める。

よく漫画などで靈気を集めるとか氣を集中させるという言葉があるが、慶一の行つてゐる作業こそがそれにあたる。

そして、実戦レベルの術者（慶一の事）になると、練り込む力の量にもよるが、その作業は一瞬のうちに行われる。

慶一の人差し指が淡いブルーに発光しだす。その指を先程は触る事の出来なかつた四角い画面のような物へと持つてゆく。

問題なく触れた。触りなれた靈子結合物質の感触だつた。程よく弾力があり、ひんやりと冷たい。

更に変化があつた。ただの四角い画面が、発光し画面に文字が映し出されると同時に、慶一の周りに色々なものが投影される。モニターのようなものもあれば、キーボードのような物もある。

「実はその装置、インターネットみたいに靈子を通してネットワークを結べるの」

衝撃発言。

「突つ込んでいいですか？最早SFですよこれ。一体何世代進化してるんですか？」

一気に3世代ぐらい超えた技術力に疲れ果てた慶一の突つ込みにはまるで力が無かつた。

「プラン自体は四十年も前からあつたのよ。それを実現する技術が無かつただけで」

「つまりもたついている間にパソコンに先を越されたと」

「その通りよ。でもさつきも言った通り、結局まだ使える人間の限られた試作品だけどね。話を戻すけど私達にしか使えないと言うのが非常に都合がいいのよ。靈子間のネットワーク結ぶ事で今までよりも情報のやり取りがスマートになるわ。いくら国家機関といつても非公式な組織じやインターネット上で大々的に情報の開示なんて出来ないからどうしてもやり方が古臭くなっちゃうのよ。情報を求めて遠路はるばる足を運んで空振りでしたなんて腹の立つ展開も少なくなるでしょ」

「確かにその通りですけど、こんなもの持つてる人も少ないんじやないですか？俺も桜子さんに聞くまでこんな物の存在は全く知りませんでしたし」

慶一は思いついた事を口にしてみた。

「それなら大丈夫よ。これは国から機関に所属する全ての人間に配られる事になつてゐるから」

「へえ、万年低予算の貧乏期間に対して随分思い切つた真似をしましたね」

「あら、言つてなかつたかしら」

「色々聞きましたけど、桜子さんが何か言いたそุดだから聞いてな
いつて事にしつきます」

「私達の機関は本日より、超自然的事象研究協会所属の悪霊被害対
処課と言つ名前がつきました」

人間追い詰められると信じられないほど視野が狭まる（前書き）

2話目です。1話を見返してみたのですが、誤字脱字。不自然な文
章が多数見つかりました。お恥ずかしい。後ほど修正しようと思つ
ています。

人間追い詰められると信じられないほど視野が狭まる

予期しなかつた桜子の襲来により一日のスケジュールに若干の遅れはあつたが、朝の鍛錬は無事に済ますことが出来た。

何より現在の慶一は機嫌が良かつた。

明治時代から名前の無かつた機関に名前がついた事。

その理由が思索段階とはいへ、靈子れいしを収束させるテクノロジーの誕生だつた。これにより事実上靈魂の存在が証明され、政府が機関の事をひた隠しにする必要性が一段階下がつたからだ。

しかし、そんな事はどうでも良い。

「引越し、引越し、楽しい楽しい引越し。今日でぼろい部屋からおさらばあ」

調子つぱずれな自作の歌を機嫌よさそうに歌つてゐるのは無論慶一である。超自然事象研究協会という名前がついた事により、協会所属者達の労働環境が見直されることになつたのだ。滞在時の住まいや給与まで全てが改善されると言う話を最後の最後まで黙つていた桜子はやはり人が悪い。

朝のホームルーム前のひと時をこんなに良い気分で迎えるのは初めてのことだつた。

「湿氣で畳にキノコがあ、生える事も無い」

そこで慶一は気付いた。

「キノコもう生えないの?じゃあ俺は雨の降り続く梅雨の時期には一体何を食べれば……」

慶一は雨の降り続く梅雨の出来事を思い出した。野鳥はどこかへと姿を隠し川の水は増水し、思つように魚も取れなかつた。苦しい時期だつた。三日以上を野草で食いつないだこともあつたのだ。おひたし、中華風野草炒め、イタリア風野草パスタ等幾重にも飽きないための工夫をしたが所詮は草。すぐに飽きた。単調な食事と偏った栄養によつて荒みかけた慶一を救つたものこそが部屋の片隅に生

えるキノコ達だった。とりあえずキノコを醤油で炒め、毒キノコだつたらどうしよう、とビクビクしながら口に運んだものだ。結果そのキノコは食べる事ができる事が実証され、慶一は新たな食材の確保に成功した。

あの時の感動は半年以上経つた今でも鮮明に思い出せる。そのキノコが、無くなる。自分の命をつないだキノコが無くなってしまうのだ。

死活問題である。

「ああああああああ

慶一の体ががたがたと震え出す。

「ブリーーーズ！！！キノコ・イン・カムバー——ク！！！」

思わず口から出た、慶一の絶叫は間違いだらけの英語だった。とても高校レベルとは思えない。

そんな慶一にクラスメイトは生暖かい視線を向けるわけだが、本人はそれ所ではない。

「キノコがあ、きのこがあ。キノコおおおおおおおおおお

周囲の反対で無理やり仲を引き裂かれる恋人の名前を呼ぶかのような悲痛な叫びだった。

来年の梅雨までに解決しなければならない問題に直面した慶一には周りの事を気にする余裕が無かつた。普段だつたら気付くであろう気配にもそのときの慶一には気が付くことは出来なかつた。

「朝から面白い叫び声あげてるな。斗蔵」

「なんだ、佐久間か。何の用だ？俺は今重大な問題に直面してるんだ。」

少なくとも本人には重大な問題であるキノコの代わりになる食材を頭の中で暗中模索している最中に話しかけてきた少年は何処までも温厚そうな目をして眼鏡をかけている。

彼のフルネームは佐久間智樹、慶一とは学校内で一番仲の良い人物だ。桜子とは違い見た目の通り温厚な好青年であり、優しげに整った顔立ちと誰にでも平等に接する事も出来るため人望も厚く。女

子からも人知れず人気の高い貴重な存在だ。

「重大な問題つて？さつきのキノコが関係してるので？」

「ああ、俺の生活から潤いと栄養を奪いかねない極めて重大な問題だ」

「良かつたら俺に聞かせてくれないか。何か力になれるかもしれん」慶一は迷った。目の前のこの温厚そうな少年に自分の行いを洗いざらい話してしまっても何も問題は起こらないのだろうか。

慶一として始めから狩人のような生活をしていた訳ではない。当然この生活を始めるかどうかの状況に陥った時には葛藤があった。葛藤を乗り越え、躊躇いを振り切ったその先が今である。實に情けない。

目の前のこの少年はこんな自分をどう見るだろうか。

「佐久間」

慶一は真剣な目つきで智樹を見据え聞いた。

「お前自給自足をどう思う」

「え、それ今の話となんか関係あるのか？」

「いいから。どう思うかだけ聞かせてくれ」

智樹は暫く考える素振りを見せた後言つた。

「凄いと思うよ。生活の全てを自分で賄うなんて中々出来るものじゃない」

その言葉を聞いたとき慶一の心は決まった。この好青年に全てを打ち明けよう、と。

「佐久間自給自足はお前が思つてるほど綺麗なものじゃない」

その言葉を皮切りに慶一は話し続けた。親元を離れてこの学校へ入学したはいいが、与えられた部屋がとてつもなくぼろかった事。仕送り五万という予算内での食つや食わづの生活でやむおえなく始めた狩人生活。獲物が取れなかつたときのひもじさ。

「そんな時俺はひつそりと部屋の片隅に生えているキノコの存在を思い出したんだ」

「ま、まさか」

智樹の顔に緊張が走った。

「食つたのか？」

若干引いているように見えるのは氣のせいだらう。

「賭けだつたよ。チップにしたのは俺の命だ」

苦い思い出を語る慶一の顔も影が差したようになつていて。その顔を見た智樹が生睡を飲み込む。

「……それで？どうなつた」

先を促す智樹。

「掛けには勝つた。俺は命をベットして命を手に入れたんだ」

そこまで語り。慶一は力を全てを出し切つたかのように椅子の背もたれへ体重を預けた。

「そして近いうちに俺はもう少し条件の良いアパートに引っ越しする事になる」

「よかつたじゃないか」

嬉しそうにいう智樹だったが、相変わらず慶一が思いつめた表情をしている事に気付く。

「どうした？」

「俺も始めはそう思つたさ。これであのオンボロアパートからもおさらばだ。トイレも水洗、風呂もある。何より雨漏りも隙間風も無い。快適ライフが約束された、俺だけのコートピア。そう思つてたそこで一泊置ぐ、二人の間の緊張感は最早最高潮に達していた。「だが気付いたんだ。湿気が無い。よつてキノコも生えない。俺は来年の梅雨をどう乗り切ればいいんだ！！」

そこまで話して頭を抱え込む慶一の肩に手を置き智樹が言った。

「バイトすればいいんじゃないかな」

慶一は智樹の一言を聞いたとき、かなりの時間固まっていた。力と口を見開き、口をあんぐり開け、リアルムンクの叫びのような表情で智樹を見つめたまま固まっていたのだ。

「アルバイト、だと」

それだけをやつとの思いで搾り出す。貧困生活で毎日を必死で生きる慶一にとつてアルバイトという発想そのものが抜け落ちていた。「うん俺等の歳じやまだそんなにもられないけど。それでも少しあ足しになるんじゃないかな」

「そうか、その手があつたか。佐久間、どこか深夜で雇ってくれそういう所はないか?」

(未来への道は開いたさあ行け慶一) そんなナレーションが頭の中に響くくらいにハイになつた慶一だが……

「深夜のバイトは年齢制限があつて無理だつて。バイトなら学校が終わつてからでも出来るじゃないか」

ようやく未来への希望が見えたと思つた慶一だが、その希望は年齢制限と言う現実に蹂躪された。

「それは無理だ。実家の仕事があるから、就業から日付け変更時刻までは高確率で拘束される」

そう言ってガックリと頸垂れる慶一。

「そのバイト代が、仕送りの五万?」

「……そうだ」

それだけを言うと慶一は動かなくなつた。あまりにも不憫な友人を智樹は黙つて見つめるしか出来ない。

「斗蔵。あんたバイト探してるなら家の店でやらない？」

慶一は魂が口から出そうな顔で声のする主を見やる。

声の主は慶一と佐久間のクラスメイトの朝倉薰あさくら かおるだった。セミショートの黒髪をしていて目のパッチリとした快活そうな少女である。薰と言つ中性的な名前の通り性格も普通の女子よりや男よりも女子からは頼れる姉御的な存在として慕われている。普段は仲のいい友人と一緒にいるのだが、文化祭がきっかけで、慶一と智樹と一緒に居ることも多くなつたのだ。智樹ほどではないが薰も慶一とは親しい友人の一人だ。

「朝倉、お前今的话全部聞いてたのか？」

額に手をやりながら言つ智樹。

「全部つて訳じやないけど、大体の事情が飲み込めるくらいは聞いた。でつ？斗蔵、どうなの？家の小料理屋経営してんんだけど、そろそろ忘年会でさあ。正直猫の手も借りたいのよ」

「やりたいのは山々だが、俺は放課後以降は予定が……」

無論『本業』の事だ。

「その手伝いが終わつてからでいいからさあ。店も深夜の一時まで営業してゐるし、知り合いのところなら深夜でも関係ないわよ。あくまで手伝いつて名目で、お願ひ！」

挿むように手を合わせる薰。

「いいのか？殆どいふ意味無いんじゃないか？」

「言つたでしょ猫の手も借りたいつて。労働時間は短いから給料はそんなに出せないけど、まがな賄い位なら出せるわよ。キノコよりは栄養あると思うけど」

「そうか、ありがとう、朝倉」

慶一にだつて分かる。書き入れ時を過ぎた時間帯に自分が来ても大して意味が無いだろうと言つことも。少しでも力になろうという彼女なりの彼女なりの優しさなのだという事も。

「礼なんかいいわよ。猫の手借りたいって言つたけど、本当に猫の手だったら徹底的に鍛えてやるからね」

始業を告げるチャイムが鳴った。

「それじゃあまた後で」

薫がそう言つと席に戻つて行つた。

「なんとか正月は越せそうだな」

慶一の背中を一度軽く叩くと智樹も席へと戻つていつた。
始めは学校なんて興味が無かつた。

国の要請で偶々入る事になつただけの隠れ蓑だった。

だが、やはり一年近くも通つていれば楽しい事もあつた。出来ればもう少し、この優しい日常が続けばいい。この日常を脅かすのが妖魔であるならば、自分はそれと戦おつ。

誰のためでもなく、自分のために。

そんな決意を胸に秘めながら慶一は一時間目の授業を睡眠に当つた。

人間追い詰められると信じられないほど視野が狭まる（後書き）

やつと話の本筋に入れそうです。相変わらずテンポが悪く無駄に字数の多いこの話を読んでくださった方、有難うございます。次から。青春・バトル・ホラー的な要素を組み込んだ話を書いてゆくつもりです。

喫茶店に入るとついつい長居をしてしまう自分が嫌

待ち合わせとはあらかじめ決まつた時間に決まつた場所に集合することをいう。

放課後になり携帯の電源を入れた慶一は自分の携帯に一件の伝言が入ってる事に気が付いた。

伝言内容はこうだつた。

「東条です。今日の仕事の集合場所なんだけど、駅前に新しくオーブンした喫茶アルプスに変更ね。あそここのチョコレートケーキが絶品らしいの。餡子あんこから大学芋まで甘い物なら何でも食べたい私としては、そんなに美味しいチョコレートケーキなら絶対食べなくちゃいけないのよ！そういうことで今日の夕方の六時に喫茶アルプスに集合ね。……つあ、そうそう。喫茶アルプスのマスターなんだけど、有名なケーキ店で修行を積んだパーティシエだつたらしくてね……」

録音の時間が切れたらしく音声はそこで途切れていだが、要するに桜子がケーキを食べたいからと待ち合わせ場所を変更したのだ。しかしながら一向に桜子はやって来ない。

集合時間直前に桜子から少し遅くなるという連絡を受け取つた慶一はその言葉を鵜呑みにし、喫茶店で待ち続けることにした。既に一時間が経とうとしていた。すぐと言う言葉にに対する認識の相違だった。

何度も桜子に連絡を取ろうとした慶一だったが、桜子の電話はずつと話中で一向に繋がらない。

金もないのにコーヒーを注文し。一杯のコーヒーで一時間も粘つたせいで従業員の視線も心なしか冷たい。
そんな事もあり、慶一のストレスは着実に溜まつて行く。行き場をなくしたイライラがとうとう臨界点を迎えた。

「あああああ！遅い、遅すぎる！！！！早朝の集合じゃあるまいし！！しかも待ち合わせ時間だって自分が指定した時間じゃん！！

ちょっと遅れるつて言つてたじやん！－一時間がちょっとなの！？

「一時間あれば何が出来ると思つてるんだ！」

慶一は『喫茶』アルプスの中心で不満を叫んでみた。慶一が不満をぶち撒けた直後、店内は水を打つたように静まり返った。数秒間の静寂の後、『喫茶アルプス』の店内は慶一が叫ぶ前と同じ状態に戻った。

どうやら関わりあわない方が善いと見ない事にされたようだ。

慶一もそれですつきりしたようだ、

「すいません。コーヒーの御代わりください。一番安いやつ」

一時間かけて、ようやく開けたカップを掲げ近くを通ったウェイタレスに声を掛けた。

訓練された営業スマイルを浮かべ、振り返ったウェイタレスだが、先程何かを叫んでいた客に声を掛けられた事を知った瞬間、その笑顔が引きつった。「かしこまりました」と引きつり笑顔のまま言い、伝票を取り上げてそそくさと退散するウェイタレスを悲しげに見ていた慶一だったが、自分に近づく足音に気が付きそちらを振り向く。

足音の主は慶一を一時間も待たせた張本人だ。長い黒髪を後ろで一本に縛りつた桜子はニットのセーターにジーンズを穿いていた。腕には外で着ていたと思われるクリーミー色のロングコートが抱えられている。

「遅い。遅すぎますよ桜子さん。少し遅れるつて連絡受けてから一時間ですよ。電話も繋がらないし、おかげで一杯のコーヒーで一時間も店に……桜子さんどうしたんですか？」

矢継ぎ早に桜子に待たされた一時間分の不満をぶつける慶一の言葉が途切れたのは桜子の表状がいつもと違ひ深刻味を帯びている事に気付いたからだ。

いつもの優しげな微笑は無く、仕事中、それもかなり神経を使う仕事をするときにする表情だった。

「ごめんね慶一君。ちょっと深刻な問題が起こってね。その事について色々上層部と話し合っていたのよ。ケーキはまたの機会にする

わ

そう言つと桜子は慶一の「コーヒー」を持つてきたウェイトレスを呼び止め同じ物を注文する。

「問題?」

ウェイトレスが去つたのを見計らい慶一が気になつたワードを疑問系にして抜き出す。

「辻沢市の北部を担当していた退魔師、きりや桐谷君の事は知つてゐるよ」

「ええ、おなじ地区の担当ですから。情報の交換なんかは何度かしています。桐谷さんがどうかしたんですか」

「コーヒーを啜りながら暢気に言つ慶一に桜子は立つた一言だけ告げた。

「殺されたわ

慶一の顔が強張る。特別親しい訳ではないが自分の知る人間が殺されるという事はやはり何度経験しても慣れない。しかし、妖魔と戦う自分もいつ死んでもおかしくない。慶一にとって、死とは他人事ではないのだ。

慣れない事だが初めて体験する事でもない。慶一は亡くなつた者の冥福を祈るように默祷をささげる。これは慶一が知人の死を知つたときにやる癖だ。

数秒後、目を開いた慶一の第一声は知人の死を憂う言葉でもなければ、あの人には世話になつたというような昔話の類でもなかつた。

「……そうですか。桐谷さんを殺したのは妖魔ですか?」

無駄話を省き早速話の本題に入る慶一だったが、彼の言葉に桜子は首を横に振る。

「違うわ

表情には出さなかつたが慶一は驚いていた。退魔師や除霊師が殺されたとなれば大抵の場合相手は強力な妖魔だつた。慶一もそう言った前提で話を進めようとしていたのだが、

「違うって、どう言つことです」

知らず知らずに慶一の眉間に皺が寄る。

「彼を殺したのは人間よ」

妖魔でないとなればあとは簡単な話だつた。

「なにか決定的な証拠でも出たんですか?」

可能性は〇ではないが敢えてその可能性は外していた。理由は單純だつた。退魔師と言う人種を殺せる人間はかなり限定される。妖魔と戦う訓練を受けてきた退魔師を殺すにはそれと同等かそれ以上の力が必要だからだ。

さらに、辻沢の担当になる退魔師達は皆腕利き達で構成されている。並みの退魔師が命を狙つたところで返り討ちに合う可能性が高い。そんなリスクを犯して強力な退魔師を殺すメリットが考えられないからだ。

「いえ、状況証拠ってやつかしら。彼のチームを組んでいる者が彼の家に行つた時、返り血を浴びた犯人らしき人物がいたそうよ。声を掛けたら窓から逃げたらしいわ」

「そうですか。それで、容疑者は?」

「まだ捕まつてないわ。その事を上に報告したの」

「それで、上はなんて」

「容疑者の身柄を私達で拘束するように言われたわ」

「それはやはり……」

警察に頼らずに容疑者を拘束したいという協会の態度が彼を殺した人物はどんな種類の人間なのかを物語つている。

「そうね桐谷君を殺したのは現職の退魔師よ」

「ヒーを一口噛む桜子。

「容疑者の身元は分かりますか?」

容疑者の拘束に必要な情報を慶一は桜子に訊く。

「ええ、私達の世界は存外狭いの。目撃者が容疑者の事を知つていたわ」

そう言って桜子は慶一の方に一枚の写真を差し出す。

写真には少女と青年が写っている。写真に写る端正な顔をした長

髪の青年を慶一は知つてゐる。男はカメラに向かつて微笑んでいた。

「桐谷さん」

「彼と一緒に写っている女の子が容疑者よ」

慶一の目は写真の中の桐谷の後ろに立つ少女を捉らえる。黒い髪を後ろで団子状に結つた少女はどこか殺された桐谷とにた所があつた。

彼女の方はカメラに向かつてひまわりのよつに屈託のない笑顔を浮かべている。

「桐谷恭華殺害された桐谷恭介の実の妹よ」

暗いところでは足元に注意しよう

辻沢市内は人と自然がある程度共存する町、いわゆる田舎というやつで都心では考えられないような抜け道なども数多く存在する。薰の家までは歩いて二十五分程度だが、それは学校の定めた通学路を使った場合の話で、抜け道や裏道を使えば、自宅までの距離を大幅に短縮する事も可能である。

したがって学校の生徒は殆どの場合通学路は使わずに獣道を突っ切ったり、迷路のような林の中を突っ切る方法で家へと帰る。

薰もその中の一人でいつも複数ある近道の中からその日の気分でどの道を行くのか決める。

「今日はこっちから帰ろう」

薰の選んだ抜け道は、様々な木々が蔽い茂る雑木林だった。夕暮れ時の弱い光は完全に遮られ、数メートル先も見えない。

鬱蒼とした林を突っ切るのは流石に抵抗があるが、通学時間が半分以下になると言つメリットがあるため、薰はよくこの道を使う。この道は高校に入学してから発見した抜け道だった。

薰が早く帰りたがるのは別に彼女がプライベートはなるべく家で過ごしたい引き籠り予備軍というわけではなく、彼女の両親が経営する店の手伝いをするためだ。

両親が店を経営していると言つても、特別大きな店でもない。むしろ小規模な小料理屋だが薰はその店が好きだった。

小規模店の例に漏れず、小料理屋『朝倉』は常連客で成り立つようなんだ。料理の味は良いらしく常連達には隠れた名店と言わせる程だ。

一度、口コミで噂が広まり、とあるニュースのグルメ特集に取材をさせて欲しいとオファーがあつたことは薰の自慢である。

しかし、薰の父親つまり『朝倉』の店主である朝倉豊治はそのオファーを断つたのだ。

テレビに出れば客足も伸びると喜んでいただけに、父の判断に納得できない当時の薫は理由を訊ねた。

「客足が伸びたら今まで巣廻にしてくれた常連さんに迷惑が掛かる。俺はうちの雰囲気や味を本当に大事にしてくれる常連さんを大事にしたいからな」

その時薫は父の商売人としての本質を見たのかもしない。

利益を伸ばすより、常連客への義理通しを選んだ父は経営者としては三流かもしれないが、薫にはそんな父が妙に誇らしく思えた。結局客入りはそんなに伸びなかつたが、そんな父の判断は常連客達には好評だつたらしく。自分の部下を連れてきたりとか忘年会等の会場に朝倉を選んでくれたりと昔以上に巣廻にしてもらつてている。親に手伝えと言われたわけでもない、バイト代が出るわけでもない。それでも薫が親の店を手伝うのは、気のいい常連客との冗談の飛ばし合いや、長年かけて常連客との関係を築いた父親の傍らに身を置く事がいい勉強になると信じているからだ。手伝いのために早く家に帰ろうという氣にもなる。だからこそ鬱蒼とした林も突っ切る事が出来るのだ。

薫は鞄から常備した懐中電灯を取り出すと、林の中へと入つていった。

木々が蔽い茂つた林の中は冬の夕方には既に光が届かなくなるので懐中電灯の灯りが頼りだ。

しかし、残念ながら懐中電灯だけで視界を百パーセント確保出来るわけではないので、用心しながら歩を進める。

そういえば今日は自分のクラスメイトが手伝いに来るかもしれないという事を思い出した。

「部屋に生えたキノコを食べた、か」

その場面を容易に想像できるので思わず笑つてしまつ。

斗蔵慶一と親しくなつたのは九月の文化祭の時だという事を思い出す。一緒に行動するようになつてからからほんの一ヶ月しか経っていないという事実に驚く。

「なんか、もつと昔から一緒に居たような気がするんだけどなあ」「元々はクラスが一緒というだけで話をした事もなかつた人間だ。それが何故あんなに近しく思えるのかという疑問はきっと解明する命題の一つなのかも知れない。

ただし、薫が一つだけ断言できる事は、慶一に恋愛感情は抱いていないという事だった。

よく、男女間の友情は成立しないと嘯く人間がいるが、薫にはそうは思えない。現に慶一は自分にとつて大切な友人だという認識だし、向こうもそう思つていると信じている。しかし、彼に対して友情という言葉では済ませないような感情を持ち合わせているのも事実だが、断じてそれは恋愛感情ではない。むしろ異性としての魅力ならば彼の友人の佐久間智樹の方に感じている。

慶一に抱く感情は正体不明だが、決して気持ちの悪い物ではない。むしろ心地好い。

もしやこれが愛というものではないか。という考えが頭をよぎるがあまりにも馬鹿馬鹿しかったのですぐに忘れる事にした。

「出来の悪い弟つてのも違うしなあ」

自分が今だかつて遭遇した事の無い未知の感情について考えていた薫の視界が突如大きく振れる。考え方には頭しすぎて注意が散漫になつっていた。彼女がごく自然に踏み出した足の先は極端に傾斜の強い崖のような坂が続いていた。

体勢を立て直すような事も出来ず、みつともなく地面を滑り落ちてゆく。三メートルはある高さをほぼ垂直に滑り落ちた薫は勢いよく尻餅を付くようにならざりした。

「うう、痛あ。死ぬかと思つた。つげ！」

思わず声を上げてしまつたのは自分が落ちたすぐ横の地面に所々歪に突き出した大きな岩があつたからだ。

「よかつた、ここに落ちなくて。私つてラッキー……ではないよね」とにかく現状を把握しよう。次の行動方針を決めた薫はまず自分がどこかに大きな怪我を負つていないかを確かめる。所々擦り傷は

あるが、骨や筋には異常はない。尻餅を付いたところは未だにジンジンとした痛みが残っているが、歩行には問題なさそうだ。自分の体に下した診断だった。

それが終わると、自分の体の動かし方を確かめるような動作で立ち上がる。

薰の腰に痛みが走る。落ちたときの衝撃で痛めたのだろう。動けないほどの痛みはなかつたので手で腰を摩りながら、落ちていた懐中電灯を拾い上げるとノロノロと辺りを見回す。

そこで初めて妙なことに気が付いた。よく見ると薰の落ちた穴は、円柱型の抜き型で地面を繰り抜かれたように綺麗で均一な物だった。薰の目算及び主觀だが半径が十メートルはありそうなその穴の深さは何処も同じで、地面は綺麗に均されたような印象を与えた。

さらに薰が落ちてきたのと丁度反対の斜面にこれまた綺麗なアーチ型の横穴が空いていたのだ。

近寄つてみなければ具体的なことは分からぬが、大の大人が三人は楽に通れる程の穴だった。

「なによこれ。大規模な嫌がらせ？ つうかこれビデオやつて上るのよ？ もう訳分かんない。ああイライラする」

あまりにも理不尽な展開に憤る薰。自分が落ちてきたほぼ垂直な斜面を思い切り蹴飛ばす。しかし壁を蹴ったところで状況が好転するわけはない。

分かつた事といえば質量の大きな無機物にハツ当たりをしても痛いだけということ。蹴った力がそのまま薰の足に向かって跳ね返ってきた。つま先を抱え飛び跳ねる様子は誰かに見られるのは恥ずかしいが誰にも見られていなくても十分空しかつた。

「なにしてるのかねえ、私は……」

情けなさのせいか、仰ぐように上を見る薰の目に飛び込んできたのはかささつきまで歩いていた林の中とは違い、既に陽の落ちた空に浮かぶ星空だった。周囲に光がないのでよく見える。

「星つて意外に明るかったんだ」

電球等の光には遠く及ばない弱い光だが、その控えめな輝きを薰は好きだと思った。

「とにかくどうにかして上に出なきゃ」

といつても具体的にどうするかは何も分からぬ。真つ先に思いついたのは携帯電話で助けを呼ぶ事だったが、薰のいる場所は圈外だった。

斜面を掘り進め、階段を作つて出ようかとも考えたが、固い土を素手で掘るのは現実的ではない。

結局落ちてきた箇所をもう一度上るという方法を取つたのだが、斜面は急な上に取つ掛かりがなる物が少なく、とても上れるものではない。

一時間が過ぎ一時間が過ぎた頃になると、体力が限界を迎えたのか、薰は地面にへたり込む。汗と泥にまみれた顔を制服の袖で拭う。落ちてきた所を上るのは不可能だった。

「あと、可能性があるとすればあの穴か」

薰が見つめる先には先程発見した不自然な横穴があつた。

「でも、あからさまに怪しいよね」

とは言つてみたが、最早あそこに入るぐらいしか薰には思いつかない。一つ溜息をつくと、ノロノロと穴の中へと入つて行つた。

穴の中は緩やかに下降している。外から見た段階では土に穴を掘つただけの物かと考えていた薰だったが、中に入つてみると木材で補強がされていた。穴の壁面に木材を貼り付け、土が落ちてくる事を防いでいる。更に地面から天井に向かつて同じ間隔で柱が立てられている。天井には播の様なものもあり、中々頑丈そうな造りをしていた。もつとも補強に使つている木材が腐っているのでしつかり機能するとは到底思えない。

当然電気など通つておらず懐中電灯の灯りを頼りに歩を進めるよりほかに無い。全くもつて不安である。

「どうして下がるかなあ。私は上に出たいんだよ」

ポツリと呟く薰。先程から自分の独り言が多い事は自覚していた

が、独り言でも言わなければ不安で仕方が無い。

薰の願いとは裏腹に、穴は下へ下へと続いて行く。どのぐらい潜つたのだろうか。緩やかな下降が終る。

直線的に伸びた道の先に薄ぼんやりとした明かりが見えた。
「なんで？」

明かりが見えた瞬間、薰は立ち止まる。電気一つ無い穴の中にどうして明かりが？不自然。危険。誰かいるの？思考とも呼べない単語の羅列が、薰の脳裏をさまぐるしく通り過ぎてゆく。

元の場所に戻ろうかと考えたが、戻ったところで事体が好転することは思えず。仕方なく光の方へと進んで行く。

暗いトンネル状の穴の先には大きな空間が広がっていた。正方形の箱の中の様な空間の四隅とそこからの対角線どうしの交点となる位置に古びた松明が置かれていた。

松明には明かりが燈つっていて薄ぼんやりとした明かりの正体はどうやらそれらしい。何故こんな所に明かりが燈つているのかはすぐに分かった。ゆらゆらとした松明の明かりは蛍光灯に比べれば弱い光ではあつたが、その光はしっかりと薰よりも先にこの空間に辿り着いていた先客の姿を映し出していた。

先客は薰と同じか少し歳下ぐらいの少女だった。十一月ということもあり点々と赤い模様の付いた白い厚手のコートを着込みベージュのパンツを穿いていた。茶色のブーツには所々に泥が着いている。黒い髪を後ろで団子状に纏め上げている。細く尻下がりの眉、疲労の色が色濃く現れる目、鼻は高いが尖った印象は無い。緊張で真一文字に結ばれた唇、そして白いコートに付いていた赤い模様と同色のベタ付きあるものが付着した陶器のように白い肌。

赤いペンキを刷毛によく染み込ませ、それを彼女に向かつて振り回せば丁度今のような姿になるのではないだろうか。もつとも、彼女に付着した模様は赤いペンキよりも幾分黒ずみ鉄臭い物だったが異様な色彩の少女はゆっくりと立ち上がる。薰は少女の手には片刃の刃物が握られていた。刃渡りは短いが、包丁やペティナイフ等

とは根本的に用途の異なる刃物が松明の光を反射する。映画などで見た事がある。

薫はその刃物の名前を思い出さうとするが、どうにも思い出せない。

刃物にも赤いものは付いている。それを見たときようやく薫は少女の顔や体に点々と付く赤い模様は血なのだと気が付く。心臓が早鐘を打ち始め、呼吸が苦しくなった。

重圧から逃れたいがために一步後ず去る。

少女は立ち上がりただけで動かない。じっと薫を見ているだけだ。睨んでるようでもなければ獲物を狙うような獰猛さも感じられない。ただ見てはいるだけだ。その目付きが逆に怖かった。

「誰？」

口を開いたのは薫ではない。よく通る澄んだ声だった。声を発したのが田の前の少女だと薫が気付くまでに若干のタイムラグがあった。

「え、あ」

田の前の少女に自分の情報を与えてしまつていいのかの判断がかず、馬鹿みたいな声を出す。そんな薫の様子を田の前の少女は大して気に掛けた風でもなかつた。

「用がないなら早くここから出たほうがいいわ。もつとも、一元用がある人間だったら殺すけど。あなたは違うでしょ」

なんでもない口ぶりだった。殺すという単語すらも滑らかに口から出でている。

「あなたはなんなの？」

ようやく出た薫の声は震えていた。

「分かりにくいけど、そこに通路があるわ。そこから出れば外に出られる。高いところから落ちる事になるけどね。大丈夫死にはしないわ」

薫の問いかには答えずに少女は薫がまだ通つていらない通路を指差しながらそう言つと血液の付着した顔で弱々しく笑つた。ようやく彼

女が自分を気遣っている事に気が付く。その時初めて、薫は少女の容姿が人並以上に整っているのだと認識する。

少女の見せた弱々しい笑顔と自分への気遣いに薫の心は揺れ始める。全身が血塗れの少女には何かの事情があるのかもしれない。しかし、同時にこうも思つた。深く関わらない方が正解だ。

どんな事情があれ、全身を血塗れにするのは異常だ。関わらない方がいいに決まっている。自分にどうにか出来る範囲を当に逸脱してしまつていて。

「早く行つた方がいいわ。ここに居てもろくな目に遭わないから」全く動く様子のない薫に少女は言う。少し焦れている様子だ。全身に血を浴びて疲れ切つたような顔をしながらも私を気遣い、その時だけは弱々しく微笑んだこの少女は信用できるのだろうか。そもそも、この少女を自分は一体どうしたいのだろうか。色々な事が異常過ぎて薫の思考もまとまらない。

しかし、これだけは断言できる気がした。
目の前の血塗れの少女は、悪人ではない。

絶対に認めたくないものは誰にでもある

殺された桐谷恭介の情報を得る為、慶一と桜子は目撃者の所へと向かう途中だつた。目撃者は彼が仕事をする際にコンビを組んで行動していた人間だ。慶一も恭介にパートナーが居る事は聞いていたが面識はない。

どんな人間になつたので桜子にその人物の事をたずねてみたのだが、彼女も面識はないとのことだ。

「なんで僕達こんな事してるんでしょう」

飲食店が数多く建ち並ぶ辻沢市では比較的大きな通りを歩く慶一が不満気に呟く。

「こんなこと？」

慶一の呟きに反応したのは、隣を歩く桜子だつた。彼女は喫茶店では腕に抱えていたクリーム色のロングコートを着ている。

「警察の真似事じゃないですかこれ」

「しょうがないじゃない。普通の殺人事件と違つて私達側の人間にによる犯行なんだから。警察に任せて、うちの情報がマスコミにでも漏れたらそっちの方が面倒よ」

「そりやそうですけど……」

「それに警察じゃあ彼女は捕まえられない」

常人離れした戦闘能力を持つ退魔師を生け捕りに出来るのは、同じように常人離れた人間に他ならない。慶一にだつてそれくらい分かっているのだがやはり気乗りがしない。

「俺達の仕事内容から完全に逸脱しますって。大体こういうのは向かないんですって俺に」

「現場の人間には状況をみて的確な判断が下せるような臨機応変さも求められるのよ」

「今回のこれは臨機応变というより、上から押し付けられたつて感じですけど……」

「その押し付けられた仕事がいかに不満な事だらうと即座に頭を切り替えて成功に導く手段を考えるのも臨機応変さの一つよ。腹の中でなにを考えるかは自由だけどね」

この時、慶一の目に桜子の周りから黒くてドロドロとした得体の知れない氣体が溢れ出している様に見えたのは、完全な幻というわけではないだろう。

カレーの大手チョーン店が目印の交差点から細い道に入り、暫くまっすぐ進んだ先に強烈なカラーリングのアパートが建っているのを確認した桜子は足を止める。

「ここよ」

鳩尾辺りの高さで腕を組み、こといつのを視線で指し示しながら桜子は言つ。樹脂性の壁面は毒々しい紫色に塗りつぶされ、素人目では材質は分からぬがここからでは屋根にはベタベタに黄色のペンキが塗つてある。

「このアパートを作つた人は一体何者でしょう……」

「それは分からぬけど、私がこの家に何らかのテーマ性を持たせるとしたら、不協和音かしら」

二人はアパートの外装の事のにはそれ以上触れずに、無言でアパート内へと足を踏み入れて行つた。

アパートに向かつて一階の一一番奥の部屋まで到達した桜子は、部屋の呼び鈴を鳴らす。

呼び鈴の音はボタンを押仕込んだときに、ピン、離したしたときには、ポン、となる古いタイプの物が未だに使われている。暫くすると扉が開き、中から男が出てきた。

身長は高いが、全体的には痩せて見える。サラサラとした髪は黒く前髪を軽く横に流している。橢円の縁なし眼鏡を掛けており眼鏡

の奥の目は絵に描いた狐のように細い。服装にはあまり気を使つていないので、緑色に可愛い熊がプリントされたトレーナーの上に年寄り臭いじてらを着込み、下半身にはグレーのスウェットを穿いている。

「おや、どなたですか？」

ドアを開いた狐目の男は桜子と慶一を見るとおどけたような口ぶりでたずねた。

「初めてまして。悪霊被害対策課の東条です。辻沢市の南部地区を担当しています」

「斗蔵です。同じく南部の担当です」

それを聞いた狐目の男は、片方の手の平にもう片方の拳の小指側を軽く打ち付ける。

「ああ、あなた達が。そうですか恭介から話は聞いていましたが。あなたのようない美しい方がこの町にいよつとは。今日ほど神に感謝した日はありません。ああ、申し送れました。私、北部地区を担当しております。日向ひなた小三郎と申します」

芝居がかつた言動でそれだけ言つと、今度は慶一に向かつて右手を差し出してきた。

慶一が日向という男に対して抱いた第一印象は調子のいい奴だった。仕方なく、差し出された右手を握り返しながら隣の桜子を見る

と、彼女は彼女で感情の読めない涼しげな笑顔を浮かべている。

「斗蔵君の噂は聞いているよ。その若さで辻沢の調査を任せられると

は大した物だ」

日向は握った手をブンブンと振りながら言つ。

「いえ、それ程でもないです」

日向の話に付き合つと話がどんどん本筋から逸れてゆくよつた気がする。慶一は困つたように桜子を見た。

「日向さん。そろそろ本題に入つてもよろしいでしょうか？」

桜子が仕方なしに言うと、日向の顔が真剣なものになる。

「分かつています。恭介の事ですね。とりあえず上がつてください。

玄関でするよつな話じゃない」

日向はそう言つと、二人を中に招き入れた。

日向の部屋は殺風景な物だった。玄関に入ると板張りのキッチンがあるが、調理器具は一切無い。ガスレンジや洗い場にも一切物は置いておらず。使われた形跡も無い。続いて慶一達が通された部屋だったが、家具らしき物は小さなテーブルがポツンと置いてあるだけだった。テレビもエアコンも布団すらも無い。本当にここで生活しているのがも怪しい物だ。

「適当に座つてください。生活用具は全部隣の部屋なんです。あつ、コーヒー飲みますか？ 缶コーヒーですか？」

そう言つて日向はベランダへと出て行く。戻ってきた時には両手に缶コーヒー三つ持つていた。どうやら常温保存らしい。

「どうぞ」

そう言つて日向は缶コーヒーを一人に手渡す。

「有難うござります。それでは早速話を伺いたいのですが。」

常温保存の缶コーヒーを苦笑いで受け取りながら桜子は言つ。日向は一度頷くと話を始めた。

「知つてると想ひますけど、僕は恭介とコンビを組んで行動します。大体の場合、僕が恭介の所に行き、そこで打ち合わせをして仕事に移るという流れでした。今日も僕は仕事の打ち合わせのつもりで恭介の所まで行きました」

日向は缶コーヒーを開けると一口飲んだ。

「そこで、既に死亡した恭介さんと、返り血を浴びたと思われる恭介さんの妹、恭華さんを見たんですね」

桜子が、先を促す。

「ええ、恭華ちゃんのことは僕もよく知つていました。よく恭介の所に遊びに来ていましたから。仲の良い兄妹でした。それが、今まで信じられません。なぜあんな事を……」

日向は顔を顰める。

「まだ、彼女が犯人だと断定は出来ません。彼女を発見したときの

状況を教えてもらえますか？」

「彼女を見つけたときの状況ですか……それは……」

今まで頼まなくとも話し続けてきた日向が珍しくその質問には言い淀み、暫く逡巡した後口を開いた。

「彼女は……恭華ちゃんは、恭介の腹の中に手を突っ込んで何かを探していました」

「腹に!? 切つたって事ですか? 手術みたいに」

慶一は眉を寄せながら聞いた。

「多分そんなんでしょう。まるで何かに取り付かれたような顔をしていましたよ。入ってきた僕にも気付かず、一心不乱に恭介の腹をまさぐつてました。僕が声を掛けると、彼女はそのまま窓から逃げて行きました」

殺風景な部屋の中に暫く重い沈黙が訪れた。慶一には理解できない。兄の死体の腹を切り開き、素手で内臓を弄ぶ桐谷恭華という人間の心理が。慶一はその風景を想像してしまい吐き気を覚えた。想像した事を後悔する。

「死体はどんな様子でしたか?」

桜子の表情も若干険しい物になつているように見える。

「まず、腹に付いた傷が一つ。さらに背中から切りかかられたような傷が付いていました。右肩から左脇腹にかけて袈裟切りにされました」

慶一もここに来る前に死体の状況を聞いていた。致命傷は背中の傷だったとしか聞いていなかつた。腹に傷があることも知っていたが、まさかそれが腹の中にある何かを探すためだけに付けられた傷だとは考えなかつた。

「でもなんで、桐谷恭華は桐谷さんの腹を割いたりしたんでしょう。理由も無しにやつたのなら狂つてる」

言いながら慶一はそれじやあ理由があれば実の兄の腹を割いても許されるのかと突つ込む。

「その事については僕に心当たりがあります」

日向が言つ。

「話してください」

桜子に促れ、日向は心当たりについて、話し始めた。

「僕らが辻沢市に駐留する理由は、お一人も知つての通りです「超自然的な事件が多発する理由の調査とその理由の除去」

慶一が答える。

「その通りです。その原因らしき場所が先日見つかりました」「何ですって！？」

普段滅多に動搖することの無い桜子が驚く。慶一とて例外ではない。驚き過ぎたせえで咄嗟言葉が出なかつただけだ。数秒掛けてようやく思考が落ち着いく。すると、真つ先に訊かなければならぬ事があることに気付く。

「そんな話、一度も聞いてませんよ」

慶一は疑問に思つた事をそのまま訊いた。

「ええ、まだ報告する前ですから」

対して日向はさも当然のように言つ。

「それは真つ先に報告する事ですよ」

その判断は絶対におかしいという意を込めながら慶一は言つ。

「ええ、私達もそのつもりでした。でも、信じられなかつた。いえ、信じたくなかったのです」

日向は苦い物を口いつぱいに含んだような表情で語る。

「先日、私と恭介は突然不自然な靈子の集まりを確認しました。今までそれに気が付かなかつたのは、その場所に強力な結界が張られていたからでしょう」

「結界ですか」

「はい、そこに有るもの認識出来なくなるような性質の結界です「人払いですか？」

「いえ、それだったら、破る方法はいくらでもあります。全く気付かないということも無いでしょ。全く別ものです。どんな原理なんかはさっぱりです。何かの拍子にその封印が弱まつたのだと思いま

ますが、どのみち人間業とは思えません

「それで、その場所には行つたのですか？」

脱線しそうになつた話を桜子が元に戻す。

「はい、もちろんです。そこで発見したのが何か強力な妖魔を封印したと思われる石でした。僕らは勝手に封印石と呼んでましたが……」

「妖魔を何かに封印するのは確かに珍しいですね」

珍しいが慶一にとつて信じられないという話ではない。昔から手に負えない妖魔を何かに封印するという手段は有るし。過去に何度かそういうしたものも見ていて。日向がこれだけのこととでそんなに取り乱すとは思えなかつた。

「ええ、それもそなんですが、実は続きがありまして。その石、正確にはその石が保管されていた場所にはさらに封印が施されました」

「石に妖魔を封印するための式ではないのですか？」

桜子が言つ。

「いえ、石 자체にも封印が施されていました。保管場所に施された封印はまた別の物を封印するものです。恐らく石に封印された妖魔の力を使ってさらに強力な妖魔を封印していたのでしょうか。封印式が妖魔の力を一定量還元出来るよつた形になつていました」

「妖魔の力を使つた封印？ そんな…………ありえない。だって…………だとしたら…………」

慶一にも桜子の言いたい事が分かつた。話には聞いたことがある。といつても神話や御伽噺の類だ。

「だとしたら。そこに封印されているのは…………」

慶一も自分で言おうとしていることが信じられない。

「封印されてるのは、生物の悪意に靈子が集まつた事によつて具現化した妖魔じやない。自然靈…………妖怪だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9514r/>

とある少年の日常

2011年4月20日03時40分発行